

# 『和泉式部日記』七夕贈答歌をめぐる試論

渡 辺 開 紀

## 一 はじめに

以下に引用する『和泉式部日記』七月の記事、帥宮と「女」(以下、主人公<sup>(1)</sup>)による七夕の和歌贈答は、作中屈指の愛情高揚の契機を謳うものとして知られる。

かくいふほどに、七月になりぬ。七日、すきごとどもする人のもとより、織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず。かゝる折に、宮の過ごさずのたまはせし物を、げにおほしめし忘れにけるかな、と思ふほどにぞ、御文ある。見れば、たゞかくぞ、

思ひきやへ七夕つ女に身をなして天の河原をながむべしとほ、  
とあり。  
(四二～四三頁)<sup>(2)</sup>

この時、二人の仲はいつ破局してもおかしくない状況にあった。七月七日という節目の折ゆえ、主人公の許には、いわゆる影の男たち<sup>(3)</sup>から、「織女、彦星」を詠んだ恋歌が届く。それなのに、肝心の帥宮からは音信が途絶えたままである。この事実ひとつとっても事の深刻さを

物語つていよう。<sup>(4)</sup>

時ばかりがいたずらに過ぎていく。「かゝる折に、宮の過ごさずのたまはせし物を、げにおぼしめし忘れにけるかな」と主人公が懊悩を深める中、ようやく帥宮からの「御文」があった。主人公が、急いで手紙を開いて見てみると、そこには「思ひきや」歌が一首だけ綴られていた。当論が、主として考察するのは、この帥宮の七夕を題材にした「思ひきや」歌である。

さて、この「思ひきや」歌に、主人公はどう反応しているか。前掲「とあり。」の直後は次のように続いていく。

さはいへど、過ごし給はざめるは、と思ふも、をかしうて、

ながむらん空をだに見ず七夕に忌まるばかりの我が身とおもへば

とあるを御覧じても、猶え思ひはなつまじうおぼす。

帥宮の「思ひきや」歌によって、主人公の気持ちに何らかの変化が生じたことは想像に難くない。なにしろ久しぶりの帥宮からの文である。ただ、歌をみた主人公の反応はいささか屈指ぎみであった。主人公は帥宮の「思ひきや」歌に狂喜乱舞するのでも、喜びに一入感じ入るのでもない。「さはいへど、過ごし給はざめるは、と思ふも」との前置きがあつてから「をかしう」という。つまり、「をかしう」という評言は少なくとも帥宮の歌のみに与えられたものでなく、この時の主人公の関心の大半は、帥宮の折をすごさぬ美質(5)に向けられているらしい。であれば、我々は「思ひきや」の歌じたいにどれほどの重みを見出してよいのか、必ずしも定かでなかつたことになる。

果たして、現行の注釈書においても、帥宮の「思ひきや」歌の受け止め方に苦心してきた様相が窺える。主人公に顧みられない受け身な姿勢(6)に重きをおくものから、その訴えの裏に皮肉を見据えるものまで、論者の認識はまちまちなのである。

確かに、帥宮の歌は、我が身の辛さを嘆く典型的な恨みの体をなしている。だが、皮肉と評するには、主人公の不実をなじる要素がいささか希薄でなからうか。少なくとも、大勢的な見方である皮肉という押さえ方は、当該歌の表現に根ざしたものでなかつたように思われる。和歌の表現を注視したとき時、当該歌の内実に何を窺い見てよいか。以上のような問題意識に応じて、当論なりに、帥宮の「思ひきや」歌に関する注釈史を整理し、一首の解釈に私見を提示する。それを以つて、掲出記事内に交わされる和歌贈答の再定位を目指すものである。

## 二 「七夕つ女に身をなして」の主体

さて、この一首の歌いぶりでも最も人目を引くのは、私に（へ）を付した、「七夕つ女に身をなして」云々であったに違いない。そして、この表現の捉え方が、そのまま当該歌の注釈史上の問題でもあった。諸注釈書において、見解が割れるのは（へ）で囲った「七夕つ女に身をなして」云々の主体が、帥宮か、それとも主人公かという点である。

素朴に考えれば、詠者である帥宮と解するのが妥当である。実際、大方の諸注釈書では（へ）の主体を帥宮と解している。ただし、これには次のような異説が唱えられていた。遠藤嘉基氏は「七夕つ女に身をなして」の箇所「補注」において、

この歌をすなおにとると、次の式部の歌から考えて、宮が織女星ということになるが、これはおかしい。もともと、「七夕つめに身をなして」という、意識的行為を示す語との呼応から考えて、かれんな調子をわざと出す為の技巧とみれば解決できぬでもない。しかし、こゝは、頭注のように考えるのがよからう。この場合、式部の歌にある「七夕」は、織女星の意ではなく、「七夕の時」「七夕の宵」の意となる。こういう用例は、他にもあるから差支えない。

と述べ、傍線を付した不自然さから（へ）の主体を、帥宮と見ず、主人公であると説く。そのうえで、身を（年に一度だけ逢う）織女星となして、天の川原を物思いに沈んでながめるような身に、あなたが予想したことであつたらうか。<sup>(9)</sup>と解したのである。

しかし、その後、右の遠藤氏に対する端的な批判と総括が、鈴木一雄氏によってなされた。鈴木氏は、

「七夕つめ」は織女星をさす。宮自身をたとえるなら、男性たる彦星（牽牛星）の方にしそうなものだが、女性であるはずの「七夕つめ」によそえているのである。この不審から五十嵐氏『完訳』は、「七夕つめ」を彦星にとるのは当時の和歌を通覧しても無理であり、式部の境遇を「ながむ」人を宮ではなく式部ととっておられる。「七夕つめ」を彦星にとるのは当時の和歌を通覧しても無理であり、式部の境遇を思いやった歌とみても、宮の贈歌ぶり、次の式部の返歌ぶりからいってどうも不自然のようである。遠藤氏『大系』補注（七〇）に示されたもうひとつの考え方、「もともと『七夕つめに身をなして』という、意識的行為を示す語との呼応から考えて、かれんな調子をわざと出す為の技巧とみれば解決できぬでもない」の方が真に近いのではないか。私は、彦星どころでなく織女星の方によそざるを得ない

——わびしくひとり「あまのかはらをながむ」という孤独感と受身な姿勢の共通性から——ところに、今の宮の心境を汲みたいと思う。「身をなして」という、遠藤氏もいわれる意識的な行為を示す語は、宮が、ことさらに、女性である「七夕つめ」に身をよそえるという男女逆の見立てからでてきたものと考えるのである。

と、委曲を尽くしながら反論を試み、

かつて一度だって考えたことがあるだろうか、自分の身を、こともあろうに織女星の境遇に身をおいて、思うにまかせぬ遠い逢瀬にうち沈んで、ひとりわびしく天の川原をながめようなどは<sup>(10)</sup>。

と現代語訳する。それでもなお、前出遠藤氏の考えを支持するものや、その論調に乗じたような解釈がないわけではない。加えて、その後、この問題は特に熱心に議論が交わされた気配がなく、なんとなく帥宮と解するのが優勢という形に落ち着いている。ともあれ、当論としても、この文脈の押さえ方を見定めるのが、さしあたって課題となるわけである。

### 三 和歌における「思ひきや」〈……〉とは

では、〈……〉の主体は帥宮か、否か。ひとまず、「七夕つ女に身をなして」云々に抱かれてきた違和感の解消には、次のように説明するのが最も簡便であろう。すなわち、男性が女性の立場にたつて詠んだ歌は枚挙に遑ない。その一点からして、帥宮と押さえるのに分があると思われる。結論的に言えば、〈……〉の主体を主人公と見ない点で、当論は通説と同じ立場をとる。

ただし、ここが帥宮であることが望ましい事情は、別角度からの説明づけが可能であった。見逃せないのは、帥宮の歌の骨子である。ここである骨子とは、初句「思ひきや」（傍線）と結句「とや」（傍点）で構成される和歌の型を指し、この型の特色を重んじて見れば、〈……〉の主体が帥宮であることがより一層了解されると思われる。

この「思ひきや」の歌い出しに関して、狩野尾義衛氏が「忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」（古今集・九七〇、在原業平／『伊勢物語』第八三段にも）を挙げたのを嚆矢に<sup>(13)</sup>、小松登美氏が『思ひきや』は、通常は、「自分は考えたこともなかった」の意で用いられる慣用句。和泉の歌の中の「思ひきや」も、すべてその意に用いられている。帥宮もおそらく同様に用いていたであろう」と



(1) は小野篁の歌である。詞書には、隠岐に配流の際のものとするから、詠歌年次は、篁が流罪となった承和五年(八三八)から、帰京を許された同七年(八四〇)ごろとなるうか。次いで、(2) は在原業平の作である。『伊勢物語』第八十三段にも見える和歌である。惟喬親王が落飾したのは、貞観一四年(八七二)年と伝わる(『三代実録』七月十一日条)。

詠歌事情こそ異なるもの、どちらの歌にも、容易には埋めがたい物理的、心理的な距離感が、かつてないほど実感されたところに、相通じるところが認められよう。篁はかつての境遇との落差を歌い上げ、片や、業平の作は、親愛なる親王の隠棲先から心ならずも帰らねばならぬ哀切が深くにじみ出た歌に仕上がっている。これらの歌に漂う極端なまでの隔絶感が、その後、「思ひきや」の語に付着せしめられていく流れは容易に想像がつく。『古今集』を通じ、胚胎せられた隔絶感が、死別を嘆く哀傷の色調に染め上げられていくのは当然の成り行きでもあつたらう。そして、この型を採用した恋歌が、総じて恋人同士の疎遠を歌いあげているのも、これまた道理なことであつたかに思われる。

もちろん、恋人たちの懸隔に焦点を当てた歌が詠まれることは、和歌史の中ではありふれた事柄である。また、それらのありがちな状況や心情を効果的に表現するのに相応しい「歌ことば」の数々が存在していた。「雨・霧」といった天象から「関・垣」など、その記号性や喚起力は論を俟たない。それらに通ずるがごとく、この「思ひきや」の型もまた、男女の懸隔を際立たせる詠み方が徹底している。勅撰集において恋に配された「思ひきや」型の歌は、次の十三首を数える。

(3) ひさしうあはざりける女につかはしける 源さねあきら

六六八 思ひきや〈あひ見ぬことをいつよりとかぞふばかりになさん物〉とは(後撰集・恋二)

(4) (題しらず) よみ人しらず

七七一 思ひきや〈わがまつ人はよそながらたなばたつめのあふを見む〉とは(拾遺集・恋二)

(5) (題しらず) (伊勢)

九〇七 思ひきや〈あひ見ぬほどの年月をかぞふばかりにならん物〉とは(拾遺集・恋四)

(6) 遇不遇恋の心をよめる

左兵衛督実能

四四一 思ひきやへあひみしよはのうれしさにのちのつらさのまさるべしとは、(金葉集・恋部下)

(7) (題しらず)

俊恵法師

七五六 思ひきやへ夢を此世のちぎりにてさむる別をなげくべしとは、(千載集・恋歌二)

(8) (法住寺殿の殿上の歌合に、臨期違約恋といへる心をよめる)

皇太后宮大夫俊成

七七九 思ひきやへしぢのはしがきかきつめても夜もおなじまるねせんとは、(千載集・恋歌二)

(9) うへのをのこども老後恋といへる心をつかうまつりけるに、よませ給うける

院御製

八六六 思ひきやへとしのつもるはわすられて恋にいのちのたへん物とは、(千載集・恋歌四)

(10) 逢不逢恋といへる心をよめる

俊恵法師

八九四 思ひきやへうかりし夜はの鳥のねをまつことにしてあかすべしとは、(千載集・恋四)

(11) 百首歌たてまつりける時、恋のうたとてよめる 待賢門院堀河

九一八 へうき人をしのぶべしとは、思ひきやわが心さへなどかはるらん(千載集・恋五)

(12) こひのうたあまたよみ侍りけるに

民部卿成範

九一八 思ひきや〈まだうらわかきはつくさの秋をもまたでかれむもの〉とは（新勅撰・恋四）

(13) 題しらず 大炊御門右大臣

八八〇 思ひきや〈かさねし夜半のから衣かへしてきみをゆめにみむ〉とは（続後撰・恋四）

(14) 宝治百首歌奉りける時、寄雨恋 土御門院小宰相

一三二四 思ひきや〈なみだにしほる袖に猶身をしる雨をそへん物〉とは（続千載・恋三）

(15) 恋の歌の中に 今出河院近衛

八九九 思ひきや〈後の世までとたのめしを恋ひしねとてのちぎりなり〉とは（続後拾遺・恋四）

(3) と (5) は等しく、恋人たちが逢瀬のない年月を悲しみ、「愛の永続への期待が裏切られたこと」を歌ったものである。(4) は七夕を題材に、「待つ人から隔てられる意に、他人事として七夕の逢瀬を見る意を重ね」て逢えない悲嘆を詠み、(6) 以下、「遇不遇恋・逢不逢恋」などの歌題に即し、逢瀬なき懸隔の表現に好んで用いられる様相が窺える。まだ見ぬ恋、忍恋等を歌う恋の初期段階はなく、一方で、恋の破綻が詠まれないのも、特色の一つと言えようか。ともあれ、帥宮の「思ひきや」歌も、そして、当面の課題とした〈〉の主体も、先の古今集歌や右の恋歌と照らし、捉え直される余地があるだろう。

その〈〉内の内実に関し、前出中村氏は「そもそもが、現実の心内文としては存在しえない思想ではなければならぬ」と指摘している。このことは、この型の草分け的存在である(1) 篁の詠歌が分かりやすい。まさか、篁が、歌中にいうように、現実には「海人の縄たき」を行う漁民に、その身が転じたことを鵜呑みにする者はいないであろう。つまり、これは一種の仮構、ないしは誇張表現なのである。

思うに「思ひきや〈……〉とは」と詠むからには、〈〉に、世上一般にありがちな悲哀や、和歌常識を、単にはめ込んで意味がない。凡事ありきたりな表現では釣り合いが取れないからである。見方を変えれば、〈〉の中には、世俗の秩序を反転させたり、和歌常識をひ

ねったり、逆手にとったりした仮講や誇張が求められた。理に走った言い回しがへへに置かれることで、この構文の効果は遺憾なく發揮される、ということだろう。つまり、「思ひきやへ……」とは「の特質の一つには、堅固な枠組みを有しながら、中身のへへは理知的で観念的な、いわば型破りな表現が歓迎される。そうすることで世の中（「男女の仲」の意を含む）から隔絶した身につまされる思いに迫真の重みを付与する詠み方だと考えられる。

右のような観測が正しければ、帥宮が、男女倒錯の形で、その身を「七夕つ女」になぞらえる事情は容易に察しが付くものと思われる。前述の通り、「七夕つ女に身をなして」の不自然さの解消に、注釈史は目が向きがちであった。現実世界の性別に揃えようとへへの主体を主人公と読み替えたり、あるいは「七夕つ女」牽牛（彦星）としたりと試行錯誤の連続であった。しかし、その処置は「思ひきや」の型の特質を無効化しかねなかった。つまり、篁の歌同様、帥宮自らが「七夕つ女」に仮構したと考えるのが、ここは最も理解しやすいに違いない。「思ひきや」の型の和歌史的展開からも、この型自体の表現性からも、帥宮が女性を装う形をとるのは、何ら不思議でなかったということなのである。

前出鈴木氏が「遠藤氏『大系』補注（七〇）」に示されたもうひとつの考え方、「もともと『七夕つめに身をなして』という、意識的行為を示す語との呼応から考えて、かれんな調子をわざと出す為の技巧とみれば解決できぬでもない」の方が真に近いのではないかとし、「身をなして」という、遠藤氏もいわれる意識的な行為を示す語は、宮が、ことさらに、女性である「七夕つめ」に身をよそえるという男女逆の見立てからでてきたものと考えるのである。」と指摘しているのは、当論と小異を含むとはいえ、概してその観測が妥当であったと思われる。

#### 四 「思ひきや」歌から見た七夕贈答

ところで、もしそうだとすると、新たな疑問がいくつも湧いてこよう。七夕伝説を踏まえて逢えない辛さを訴える方法はいくらでもある。また、和歌の素養が失われた現代人ならいざしらず、和歌に慣れ親しんでいた帥宮が、わざわざこの型を踏んでおきながら、「かれんな調子をわざとだすため」だけに「七夕つ女」云々と詠んだとは考えにくい。そもそも意想外な「男女逆の見立て」はどこから来たのかも気になるところである。つまり、諸注釈の言うように、ここに技巧の妙を窺うのであれば、その内実と意図がより確かな形で追究されなくてはな

らなかった。

その際、例えば「七夕つ女」云々を独創的なアイデアと褒め立てるのも一つの手かもしれない。しかしながら、万事につけ先例を尊ぶ、いにしえの歌詠みたちの風潮を考えると、へ～の歌句が何のヒントもなしに案出されたというのも少々考えにくい話ではないか。帥宮の「思ひきや」歌の発想の源は何か、以つてその狙いが何なのか。そう発想するとき、帥宮の「思ひきや」歌の先蹤に、ひとつの有力候補として浮上してくるのが、前掲(5)の『拾遺集』「よみ人しらず」歌ではなからうか。試みに帥宮の歌と並べてみると、語句の照応関係は明白である。

帥宮 思ひきやへ七夕つ女に身をなして天の河原をながむべしとは、

七七一 思ひきやへわがまつ人はよそながらたなばたつめの逢ふを見むとは、(拾遺集・恋二)

ただ、『拾遺集』歌が、いくら「よみ人しらず」とはいえ、帥宮の「思ひきや」歌より先行するとは限らない。そもそも、本作品と『拾遺集』との承接関係も十分に説かれてはいない。諸注釈書を瞥見する限り、右の『拾遺集』歌が、引歌や参考歌として指摘されたこともない。<sup>(24)</sup>

だが、次の事実は、右の疑問に対してある程度の回答にはなるであろう。まず、この一首は『うつほ物語』に、全く同じ形で、

その日、節供、河原にまゐれり。君たち、御髪洗まし果てて、御琴調べて、七夕に奉り給ふほどに、東宮より、大宮の御もとに、かく聞こえたまへり。

東宮「思ひきやわが待つ人はよそながらた織女の会ふを見むとは

今日さへうらやましくねたくこそおほゆれ」と聞こえたまへり。(藤原の君・一〇四頁)<sup>(25)</sup>

とある。もちろん、『うつほ物語』の成立年代も円融朝から一条朝まで幅がある。<sup>(26)</sup>したがって、帥宮の詠歌との前後関係は依然として不明とするほかないが、一方で、『うつほ』『拾遺集』に載るぐらいの知名度があったことが見逃せない。次いで、帥宮も主人公も、現存する『拾遺

集』内に見える和歌を踏まえたやりとりを交わしていた。例えば、

・(帥宮) おしはからせ給ふめるこそ。『見せたらば』とあり。(二四頁)

○ひとしれぬ心の内を見せたらば今までつらき人はあらじな(拾遺集・恋一・六七二・詠み人知らず)

・(主人公) 世の人はさまざまにいふめれど、『身のあればこそ』と思ひて過ぐす。(二五頁)

○いづ方に行き隠れなん世の中に身のあればこそ人もつられ(拾遺集・恋五・九三〇・詠み人知らず)

などが、それである。こうした状況に加え、先の『拾遺集』歌は「思ひきや」歌の和歌史の中で、数少ない恋歌であり、かつ帥宮の歌以外に「七夕」を題材にした唯一の詠草なのである。その希少性は無視しえない。このような事情を重んじてみれば、帥宮の詠歌に『拾遺集』歌を積極的に重ね合わせることは許されるように思われる。

現行の『拾遺集』や『うつほ物語』の注釈書で、「思ひきや」の型に拠った七夕歌はどう解されているか。確認してみると、

○まさかこのようなことになるとは思わなかった。私の待つ人は隔たつたままで逢うことも逢う機会もなく、織女星が牽牛星と逢うのをよそ事として羨ましく見るようになる<sup>(27)</sup>。

○わたしがひたすら待ちこがれている人は、よそながらのまま、今日織機の二星が逢うのを見ようとは、思ってもみませんでした<sup>(28)</sup>。

などと通釈されている。では、この歌や歌意に想到したうえで、帥宮の「思ひきや」歌を改めて眺めてみるとどうか。次のような含みがあるものとして読めてきてしまうのではなからうか。天上で「七夕つ女」が逢瀬を重ねているのを、地上で独り空しく眺めていた、かの古歌と同じ境地で、私の恋人が、今宵、他の男と逢瀬を重ねるのを見ることになるうとは、と解してみるのである。帥宮の歌を古歌が詠まれた状況に重ねてみたうえでの読みである。あるいは、「七夕つ女の逢ふを見む」を響かせ、かの「逢瀬を叶えた七夕つ女」とは違い、逢瀬も叶わぬまま独り空しくなめることになるうとは、と解する線はどうであろうか。古歌においては羨望の眼差しで仰ぎ見られる存在であった「七夕つ女」の立場を反転した形で擬した格好である。いずれにせよ、『拾遺集』歌の「逢ひ見る」が「逢瀬」を強く意識させるわけであり、これを以って、本作品に立ち戻れば、帥宮の主人公に対する疑惑の眼差しが「思ひきや」歌に見え隠れしてこよう。

この時期、帥宮は主人公の浮気を強く疑っていた。<sup>(29)</sup>「源少将」や「治部卿」が昼から出入りしているという噂を聞き、「あはくしう思されて、久しう御文もなし」という状況であった。文なく「小舎人童」を使いにより、主人公の様子を探っている気配が窺える(四〇頁)。そうした状況だけに、帥宮は、主人公の風聞に探りをいれるために、和歌でもって一つの便法を講じたのではあるまいか。もつとも、いくら方便とはいえ、他の男としけこんでいるのかとストリートに聞くのは、さすがに生々しくて口がはばかられる。かといって、誰かと逢瀬を重ねていないか気がかりで仕方ない。それに、もしそんな不埒な行為に及んでいたら、やはり妬ましくもあり、羨ましい。そこで一計を案じ、主人公と影の男たちとの逢瀬に対する疑念を、『拾遺集』の古歌に相似する形でちらつかせ、ないがしろにされている自分を韜晦してみせる。そうした観点から、帥宮の「思ひきや」歌は、主人公の出方を窺うために知略の限りを尽くした歌であったと評したい。もちろん、それは主人公を独占的に欲するがゆえにである。

では、疑惑の眼差しを向けられた主人公は、これにどう抗弁していけるのか。受けて立つ主人公からすれば、逢瀬どころか、「すぎごとどもする人のもとより、織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず」にいた。そんな状況だけに、帥宮の疑念を払拭しつつ、角の立たない形で帥宮をたしなめる必要があったらう。果たして、主人公の返歌は、贈歌に見えた「天の河原をながむ」という訴えを、根底から覆す形で「ながむらん空をだに見ず」と突き放して見せる。だが、ここも「逢ふを見る」を射程に入れて読むなら、あなたはともかく、わたくしは逢瀬どころか「すぎごとどもする人のもとより、織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず」におりました、心外でございませ、との抗議の心意が浮かび上がりはしないだろうか。実に見事なあしらい方であらう。それでいて、強気な態度から一転して、「七夕」ならぬ宮様に忌み嫌われております寂しい女ですから、と泣き落としの体で帥宮との関係修復を模索する。典型的な女歌<sup>(30)</sup>であり、その捌き方の見事さに、今更ながら驚かされるわけである。主人公のほう一枚上手といったところだろうが、その返歌を目にしたことで、歌の掛け合いの真骨頂を久しぶりに味わい、満足げな笑みを浮かべる帥宮の姿が「猶思ひはなつまじう」からありありと浮かんで来るように思われる。

このように見てくると、当該記事の和歌贈答は、目に見える風雅な七夕贈答の水面下で、機知と緊張を孕んだ男女の応酬が繰り広げられていたことになる。互いに深謀遠慮を張り巡らした和歌贈答によって、気持ちを確認めあい、拗れた二人の関係がかうじて繋ぎとめられている。その結末や構図のありようは、当論が考察してきた帥宮の詠歌なくして成り立ちえなかったわけである。帥宮の贈答は「思ひきや」の伝統と七夕歌の歴史に強く裏打ちされたものであったと思われる。そのような詠歌を為し得る帥宮を描くことで、作品は、帥宮と主人公とが互

角の和歌の力量で闘きあう者同士であることを念押ししてやまないのではなからうか。

## 注

- (1) 当論では、固有名詞の「女(女性)」との混乱を避けるために、作中呼称の「女」を用いず、主人公と呼ぶ。
- (2) 当論における『和泉式部日記』の本文の引用、及び、頁数は、清水文雄氏『和泉式部日記(岩波文庫改訂版)』(岩波書店・昭和五六)に拠る。なお、同書の底本は「三条西家旧蔵本」であるが、その他諸本において、帥宮の「思ひきや」歌に異同はない。
- (3) 鈴木一雄氏・円地文字子氏『全講和泉式部日記』(至文堂・昭和四〇)
- (4) 小町谷照彦氏『和泉式部日記の方法——その虚構性を通して』(『国文学』昭和四四・五)
- (5) 秋澤互氏『帥宮の美質——『和泉式部日記』折を過ぐさずからおなじ心へ』(『國學院雜誌』平成二・一)
- (6) 鈴木氏、注3の書。
- (7) 藤岡忠美氏は「この歌は、宮が自身を織女星になぞらえて詠んだ。あなたには男が多いから私はなかなかお逢いできぬ悲しい身だ、という皮肉を詠み込んだ歌。」(『日本古典文学全集』小学館・昭和四六)、「宮が自身を織女星に擬し、あなたには恋人が多いから私は独りで思い悩むという被害者の皮肉。」(『完訳日本の古典』小学館・昭和五九)、「この歌は、宮が自身を織女星になぞらえて詠んだ。あなたには男が多いから私は年に一度の逢瀬にもお逢いできぬ悲しい身だ、という皮肉を詠み込んだ歌。」(『新編日本古典文学全集』小学館・平成六)と、言い回しに多少の修正が加えられているが、当該歌を皮肉と把握する点では一貫している。また、類似の指摘は、野村精一氏『和泉式部日記(新潮日本古典集成)』(新潮社・昭和五六)の、「考えてみた事などないでしょう、自分自身あの織女星になったような思いで、天の河原をながめねばならぬような事になるなんて」女のもとに常に男が来ていることを皮肉ったのである。」や、三田村雅子氏『和泉式部日記(日本の文学・古典編)』(ほるぷ出版・昭和六二)の、「さはいへど」の箇所には「歌には皮肉がこめられているが、そうは言っても」などに窺える。
- (8) 夙に、五十嵐力氏『昭和完訳和泉式部日記』(白鳳出版・昭和二二)が「男の宮の歌だから、本来は「彦星に身を化して」と言ふべきで、棚機女は穏かでない」と述べるなど、このような擬え方に違和感を表する注釈書は少なくない。
- (9) 『和泉式部日記(日本古典文学大系)』(岩波書店・昭和三二)
- (10) 鈴木氏、注3の書。
- (11) 今井卓爾氏『和泉式部日記 訳注と評論』(早稲田大学出版部・昭和六一)に「思ったことがあるか、あなたはわが身を七夕の織女になったように思つて、年に一度天の河原をひとりぼんやりながめるであろうとは。」がある。
- (12) 野村氏、注7の書。
- (13) 『対校 和泉式部日記新釈』(白帝社・昭和四八)
- (14) 『和泉式部日記(講談社学術文庫・中)』(講談社・昭和六〇)
- (15) 『和泉式部日記全注釈』(笠間書院・平成一四)
- (16) 中村幸弘氏『哀傷歌としての「おもひきや」歌』(『弘学大語文』32・平成一八・3)。以下、当論中の中村氏の指摘に関する記述は、全て同論に

拠る。

(17) 当論における和歌の引用は、それぞれ『新編国歌大観』『私家集大成』（古典ライブラリーWEB版）に拠り、表記は私に改めた。その他、散文作品については「新編日本古典文学全集」に拠る。注18の通り、平安朝和歌に「思ひきや」の型に拠った和歌は多く、一定程度の定着を見てよい。

(18) 『私家集大成』「中古Ⅰ・Ⅱ」で「思ひきや」の歌句をもつ和歌は、計七十六首（重出除くと五十八首）を数える。その多くは、注16中村氏の言うように死別に関係する歌、哀傷的な雰囲気か漂う歌が多い。和泉式部の「思ひきや」歌（三首）は次のとおりである（清水文雄氏『和泉式部続集』（岩波文庫・昭和五八）に拠る。）

(1)

九五四 思ひきやありて忘ぬおのか身を君が形見になさむ物とは

(2) 又程経て、おはしましし所を、物の便りに見て

九六〇 思ひきや塵もぬざりし床の上を荒たる宿となして見んとは

(3) 七日

九九三 思ひきや今日の若菜も知らずして忍ぶの草を摘まん物とは

また、散文作品では『伊勢物語』一首（前掲）、『大和物語』二首（十三段「思ひきやすぎにし人の悲しきに君さへつらくならむものとは」・五十七段「をちこちの人目まれなる山里に家居せむとはおもひきや君」）、『うつほ物語』一首（後掲）、『蜻蛉日記』二首（道綱母「思ひきや雲の林をうちすてて空のけぶりにたたむものとは」（二二六頁）、道綱母「思ひきや天つ空なるあまくも袖してわくる山踏まむとは」（三二四頁））などが確認できる。ただし、当論中でも触れる通り、七夕に関連するのは、『拾遺集』（「うつほ物語」にも）（当論四節掲出）だけである。

(19) 上代作品で「思ひきや」が確認できる唯一の例は、『日本書記』巻第六・垂仁記における田道間守の会話文中に「是以往來之間、自経十年。豈期、独凌峻瀾、更向本土乎」とある箇所が、「是を以ちて、往來ふ間に、自つから十年を経たり。豈期ひきや、独り峻瀾を凌ぎ、更本土に向むといふこと。を。（新編日本古典文学全集・三三七頁）」と訓読された例だけである。「思ひきや」に「漢文訓読語」という注が散見されるのは、この用例を意識したためか。

(20) 小町谷照彦氏『拾遺和歌集（新日本古典文学大系）』（岩波書店・平成二）、「脚注」。なお、信明と伊勢の和歌は、それぞれ『信明集』『伊勢集』にも見え、影響関係がさまざまに想定されている。例えば、片桐洋一氏『後撰和歌集（新日本古典文学大系）』（岩波書店・平成二）は、「後撰集では弁解の歌という感じだが、信明集は「二三日ばかりあはぬ女に」という詞書になっており、僅か二、三日なのに何時から逢わないかと数えるほどに恋しく思うとは予想もしなかったという恋の激しさを訴えた歌になる。なお、拾遺集・恋四に伊勢の歌として「思ひきやあふみぬほどの年月をかぞふばかりにならんものとは」とある。信明が伊勢の歌を利用して伊勢の娘である中務の歎心をつとみればおもしろい」と注し、工藤重矩氏『後撰和歌集』（和泉書院・平成四）は「信明が伊勢の作を利用した可能性もあるが、信明の歌が中務を介して伊勢集に混入した可能性もある」とする。また、佐藤和喜氏『拾遺集の構造』『平安和歌文学表現論』（有精堂・平成五）は「後撰歌の「逢ひ見ぬことをいつより」とは、視点があくまで現在にあり、現在を基準にして逢わなかった日数を「いつより」と遡って数えようとする、そういう表現であるのに対して、拾遺歌では過去から現在までの時間が「逢ひ見ぬほどの年月」と客観化される。末句の「成さむ」と「成らむ」の相違もこれに対応するものであり、視点が時間の内部に現在に存す

る後撰歌では、二人の間の懸隔も「成さむものとは」と二人の現在の関係において人為的に把握され、視点が時間の内部にある拾遺歌では「成らさむものとは」と自然的に把握されるのである」（二三九頁）と指摘し、それぞれの勅撰集の構造論理に則した異同であることを指摘している。

(21) 小町谷氏、注20の書。

(22) 鈴木氏、注3の書。

(23) 七夕が民俗学や漢詩文の発想などを織り交ぜ、多彩な展開を遂げていることは、従来も多く論じられてきている。多くの先覚の論の学恩を蒙ったものの、当論の力不足ゆえ、すべての功績に触れないことを、ここにお詫びする。当論では、特に『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・平成一一）他、吉井美弥子氏「浮舟物語における七夕伝説」（『源氏物語と平安文学 第一集』早稲田大学出版会・昭和六三）が、平安朝の七夕歌を多く引証し、「七夕に二星の恋の成就を願ひ、喜び、二星にあやかりたいと望む面ばかりでなく、七夕ほど逢瀬ということに、待ち続ける辛さと年にたった一度しか会えない悲しさを思う面とが、王朝人の見方にあった」点などを参照した。

(24) 拙稿「〔研究ノート〕和泉式部日記引歌・漢籍索引（一）」（『滝川国文』35・平成三〇・3）をご参照いただければ幸甚である。沼田純子氏『和泉式部日記』の「七月七日」の章段について」（『常磐会短期大学紀要』20・平成四・3）が『うつほ物語』を参考としている。

(25) 『うつほ物語』の本文の引用、及び、頁数は室城秀之氏『うつほ物語 全』（おうふう・平成一三改訂版）に拠る。なお、この重出につき、小町谷氏、注20の書では「宇津保物語・藤原の君に作中歌としてそのまま用いられている。織女星でさえ年に一回の逢瀬が叶うのに、自分はそれにも及ばないと悲嘆する」とある。

(26) 『日本古典文学大辞典』（岩波書店・昭和五九）に「天祿―長徳（九七〇―九九九）ごろにかけての成立か。（中略）その頃すでに、「吹上」から「沖つ白波」あたりまでは成立していたのであろう」（野口元大氏執筆項目）と見える。

(27) 小町谷氏、注20の書。

(28) 中野幸一氏『うつほ物語①（新編日本古典文学全集）』（小学館・平成一一）

(29) 藤岡忠美氏『和泉式部日記―物語的構成の恋の記録―』（『平安朝和歌 読解と試論』（風間書房・平成一五）

(30) 鈴木日出男氏『古代和歌史論』（東京大学出版会・平成二）